

# レシビを読む、楽譜を読む、図面を読む (六)

## 荒城の月

小野塚知二

前回の楽譜(連載第三回「この世ならざる結婚行進曲」二〇二三年二月号)は、原曲の一部が半音高く聴かれてしまったのですが、今回は一カ所だけ半音低く歌われる話です。

### 普通の「荒城の月」と瀧廉太郎の残した譜面

通常、「荒城の月」は譜例1(次頁上段)のように聴かれ、また、前奏と伴奏付きで歌われています。速度は四分音符六〇拍/一分が指示されており、さらに「想を込めて」という標語も付けられています。ゆったりとした、少し陰鬱な歌と思われています。ところが、瀧廉太郎の元の楽譜(一八九九年)は譜例2で、一見して趣が異なります。

第一に、原曲は歌詞を八分音符で歌います。しかも速度標語はアンダンテ(歩くような速さで)ですから、一分間に八分音符を七二〜八〇拍刻みます。瀧の意図は、譜例1のように遅い曲ではありません。

第二に、譜例2の音域(B3〜D5)から、瀧は「荒城の月」

が男声斉唱で歌われることを意図していたと推測されます。テノールでもバスでも容易に歌える音域です。「荒城の月」は「箱根八里」や「豊太閤」とともに、東京音楽学校編『中学唱歌』(一九〇一年)に収録されました。「箱根八里」はハ調で、音域はC4〜E5、「豊太閤」はホ調でB3〜E5、いずれも変声期後の男性が斉唱できるように書かれています。譜例1は二調で、音域は上がF5に及んでいますので、アルトやバスだと少し苦しく、ソプラノかテノールの独唱用と見ることができません。

第三に、譜例2では「花の宴」のところがソーソーファ#ミ#ーファ#と半音刻みで動きます。「花の宴」の「のえ」のファ#ーミ#(非ファ)の動きが非常に印象的です。このミ#は普通の口短調では出現しない音(主音から増四度)だからです。譜例1では、同じ箇所がシブーシブーソラソラとなっており、ごく普通の二短調の音階に収まっています(小長久子編『瀧廉太郎全曲集』(音楽之友社、一九六九年)参照)。

譜例1 山田耕筰ピアノ伴奏付き「荒城の月」

想を込めて ♩ = 60

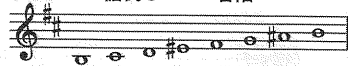
譜例2 瀧廉太郎「荒城の月」(『中学唱歌』(1901年)所収)

Andante  
mf

### 山田耕筰の意図

譜例1は、山田耕筰が一九一八年にソプラノ歌手三浦環の依頼でピアノ伴奏を付けて編曲したものです。その辺りの事情を、日本のレコード・放送音楽の草創期を知悉していた森一也(一九一五〜一九八八年)が次のように回想しています。「昭和二二(一九三七年)の秋、欧州視察から帰ったばかりの橋本國彦助教が、ある日、東京音楽学校の教室で数人の教授たちと興味深い雑談をしているのを、生徒だった小生は運良く耳にすることができました。橋本助教の話を要約すると、『欧州で音楽愛好家に会うと日本の曲を聞かせてくれという人が多い。こうした時「荒城の月」を紹介するのはよいが、山田耕筰さんがピアノ伴奏をつけた「荒城の月」でなくてはならない。瀧廉太郎の原曲のままだと「花のえん」の「え」の箇所が#がついている。つまり短音階の第四音が半音上がっている。これはジプシー音階の特長だから、外国人は日本の旋律ではなくハンガリー民謡を連想してしまう。それを避けるために山田さんは、三浦環にこの

譜例3 ロマ音階



曲の編曲を頼まれた時、Re<sub>2</sub>についていた#を取ってしまったんだ。外国で歌う機会が多い彼女にとってその方が良いとの判断だったに違いない。それで、あの歌は日本の曲らしくなった」という内容でした（森一也「荒城の月」と山田耕筰「山田耕筰の遺産II 器楽曲篇」（日本コロムビア COCAI3181、一九九六年）解説冊子に収録）。

ここで「ジプシー音階」とされているのは、譜例3の音階で、第三音と第四音の間と第六音と第七音の間が増二度（≠半音三分）となり、第四・五・六音の間はそれぞれ半音になります。譜例2の「花の宴」のところがそれに当たります。シヨパン、リスト、ドップラー、ブラームスらによって「アジア風」ないし「ハンガリー風」の色合いを帯びさせるのにロマ音階が多用されたため、ハンガリー民族音楽はこの音階で奏されるという誤解が、一九世紀ヨーロッパ（西欧）の音楽界で広まりました。二〇世紀初等にはコグダイやバルトークが開発されたばかりの可搬式蓄音機を背負ってハンガリー及び近隣各地の村々を巡って民謡を録音・採譜して、ハンガリー音楽の特質を説明することでこの誤解を正しました。それでもいまだにハンガリー音楽をロマ音階と直結させる誤解は残っています。したがって、山田耕筰が編曲依頼を受けた際に、瀧の原曲の「花の宴」がハンガリー民謡を連想させると危惧したのは正当でした。

## 瀧廉太郎の意図を推測する

とはいえ、瀧が「荒城の月」を意図的にハンガリー音楽（あるいはロマ音楽）風に書いたとは考えられません。軍隊と学校教育を通じて日本人を善導教化するために西洋音楽を用いようとした明治期の音楽家がわざわざ「西洋辺境」の音楽を中学生に教えようとは考えなかったに相違ないからです。

譜例2の四小節目「影差して」の「げ」、六小節目「分け出でし」の「わ」、八小節目「今何処」の「ま」は、いずれも口短調の通常の第四音ミになっていることから、ハンガリー風の意図はなかったとわかります。では、なぜ「花の宴」のところだけ、印象的なミ#を使ったのでしょうか。

瀧廉太郎が長生きして、「花の宴」の意図でも書いたり、語ったりしてくれたならよかったです。彼は二三歳で早世しました。「中学唱歌」の刊行直後の一九〇一年四月にドイツへ向けて横浜港を立ち、一〇月には試験に合格して、メンデルスゾーンが創設したライプツィヒ音楽院に入学しています。しかし、二カ月ほどヤードスゾーン (Salomon Jadassohn, 一八三一—一九〇二) の和声学の講義などに出席したのち、感冒をこじらせて入院し、予後もおもしろくなかったため、翌一九〇二年七月には帰国命令が出て、一〇月には帰京してきます。しかも、寄宿先の叔父瀧大吉が一月に急逝したため、東京での静養もかなわず、両親のいた大分へ転居します。死の床で書いたピアノ伴奏付き歌曲「荒磯」(徳川光圀作詞)

とピアノ独奏曲「憾」が、彼の作品として残されている最後のものです。肺結核の伝染を恐れた母が、彼の残した譜面、

ノート、覚書などすべて焼却してしまったため、意図を直接的に知るすべは残念ながら残されていないのです。

## 減七和音の誘惑

しかし、「荒磯」と「憾」の和声の使い方手がかりにして、「花の宴」の意図を探ることが可能だとわたしは思います。

「荒城の月」は譜例2のとおり斉唱の旋律のみが「中学唱歌」には載っていますが、当然、瀧は教育現場での便を考えて、ピアノやリードオルガンなど鍵盤楽器での伴奏譜も書き

譜例4 合唱版「荒城の月」



たはずです。四季四部作(一九〇〇年出版)のうち「花」「月」「雪」のような合唱曲への編曲も試みていたでしょう。伴奏や合唱となると、「花の宴」の「え」を和声学的にどのように処理するかという問題が発生します。前回の結婚行進曲のように冒頭から主調を覆すなら別ですが、穏当に口短調で始めるならば、「え」の増四度は口短調の主要三和音では扱えません。現在のポピュラー音楽ならブルーノートと捉えることができますが、ブルースが「発見されたのは「荒城の月」より後です。瀧はここで意図的に減七和音を用いたのだとわたしは推測します。減七和音というのはたいへん便利なもので、さまざまな色付けに重宝し、一九世紀後半の西洋音楽では非和声音の処理や一時転調の際に多用されました。瀧は留學後の「荒磯」八小節目の伴奏で減七和音を効果的に用い、さらに、畢生の「憾」は全曲ほとんど減七和音の実験といっても過言ではないほどに多用して、生への執着を表しています。「荒城の月」で瀧が減七和音を一箇所(譜例4の凡)、山椒のように利かせようとしたと想定して、瀧廉太郎風の合唱版を書いてみました。むろん、これはわたしの妄想の産物ですが、どこかの合唱団で歌ってくださるなら嬉しいですね。ちなみに山田耕筰のピアノ伴奏(譜例1)はこの部分にテンション和音IV6(♭6)を用いて、「花の宴」を際立たせています。

おのづか・ともじ

東京大学特命教授/名誉教授